

エステル記8-10章「プリム祭」

1A ハマンの法令を打ち消す法令 8

1B エステルの嘆願 1-8

2B 文書の伝令 9-14

3B 王服をまとうモルデカイ 15-17

2A 敵の除去 9

1B ユダヤ人への恐れ 1-10

2B 一日伸びた喜びの日 11-19

2B 祭りの制定 20-32

3A モルデカイの偉大さ 10

本文

エステル記 8 章を開いてください。私たちは、エステル記において前回、神の逆転について学びました。ハマンがユダヤ人の根絶を意図していたのに、神はそれをご自分の摂理で完全に覆されたところを読みました。

そこに流れているのは、「罪が増すところに、恵みが満ちあふれる」という原則です。あるいは、悪を意図しているのに、神はそれを善として計らうという大どんでん返しであります。悪魔は、イスカリオのユダの心に入り、ユダヤ人たちによってイエスを捕え、十字架につけるように仕向けたのですが、実はその十字架において悪魔が裁かれ、滅びる決定打であったということです。私たちは、このことを心に留めなければいけません。自分の罪で悩まされているかもしれません。しかし、十字架につけられたキリストを眺める時に、その流された血を見る時に、それらの負の遺産がすべて恵みの賜物へと変えられているのを見ます。

そして残りの三章には、モルデカイがそのままハマンの地位に着くことを読んでいきます。その恵みの賜物によって、命が支配する、その喜ばしい、輝かしいキリストの統治を私たちは読むことができます。

1A ハマンの法令を打ち消す法令 8

1B エステルの嘆願 1-8

8:1 その日、アハシュエロス王は王妃エステルに、ユダヤ人を迫害する者ハマンの家を与えた。モルデカイは王の前に来た。エステルが自分と彼との関係を明かしたからである。8:2 王はハマンから取り返した自分の指輪をはずして、それをモルデカイに与え、エステルはモルデカイにハマンの家の管理を任せた。

アハシュエロスは、ハマンがモルデカイのための用意した柱にハマンをかけました。その後、ハマンに与えていた指輪をモルデカイに渡します。アハシュエロスは、モルデカイがユダヤ人であることは知っていたし、そしてエステルもユダヤ人であることをハマンとの宴会の時に知りましたが、モルデカイとエステルが養父と娘の関係であることは、今、知りました。その関わりから、主が王の心を動かして、モルデカイにハマンに与えていたその権威を与えたのです。王の指輪を持っているということは、法令を自分の思うままに書くことができる権威であり、ペルシヤを統治する力が与えられたということです。

そして、ハマン本人は死にましたが残されたハマン家に対してどのような処罰を与えるか、その権限を王はすべてエステルに与えましたが、エステルはモルデカイにその管理を任せました。そして次に、エステルは再び王に嘆願します。

8:3 エステルが再び王に告げて、その足もとにひれ伏し、アガグ人ハマンがユダヤ人に対してたくらんだわざわいとそのたくらみを取り除いてくれるように、泣きながら嘆願したので、8:4 王はエステルに金の笏を差し伸ばした。そこで、エステルは身を起こして、王の前に立って、8:5 言った。「もしも王さま、よろしくて、お許しが得られ、このことを王さまがもっともおぼしめされ、私をおいれくださるなら、アガグ人ハメダタの子ハマンが、王のすべての州にいるユダヤ人を滅ぼしてしまえと書いたあのたくらみの書簡を取り消すように、詔書を出してください。8:6 どうして私は、私の民族に降りかかるわざわいを見てがまんしておられましょう。また、私の同族の滅びるのを見てがまんしておられましょうか。」

エステルは、王に召し出されていないのに、再び嘆願のために内庭に入りました。王はすかさず金の笏を出しています。ハマンが死んだだけでは、問題解決になりません。なぜなら、法令はまだ生きているからです。それは王の名による書面なのですから、王にしか打ち消すことはできません。しかしアハシュエロスは、午前お話したように「取り消す」とは言わなかったのです。

8:7 アハシュエロス王は、王妃エステルとユダヤ人モルデカイに言った。「ハマンがユダヤ人を殺そうとしたので、今、私はハマンの家をエステルに与え、彼は柱にかけられたではないか。8:8 あなたがたはユダヤ人についてあなたがたのよいと思うように、王の名で書き、王の指輪でそれに印を押しなさい。王の名で書かれ、王の指輪で印が押された文書は、だれも取り消すことができないのだ。」

王はモルデカイも呼んでいます。なぜなら、王の指輪を持っているのはモルデカイだからです。そして彼が与えた助言は、新たに法令を作りなさいというものでした。ペルシヤの法令は、取り消すことのできないものです。したがって、ユダヤ人を根絶やしにするという法令も取り消すことはできません。

ここで私たちが法令について、その性質を知る必要があります。神の律法においても、これは適用できるからです。罪を犯した魂は死ぬ、という言葉がエゼキエル書にあります。ローマ 6 章 23 節にも、罪から来る報酬は死です、という言葉があります。イエス様を信じてクリスチャンになったら、イエス様の流された血によって、これらの罪は洗い清められました。もう神の前に罪が思い出されることはありません。それでは、その後には罪と死の法則が無効になったのでしょうか？いいえ、もしその後罪の中に生きていたら、その人は滅びる者たちと共に潰えるでしょう。罪から来る報酬は死であり、その法則は取り消されることはないからです。

キリスト者においても、罪と死の法則は働いています。キリスト者はこの法則に対して、どうみなしていけばよいのでしょうか？「自分は死んだ」とみなしていくことです。キリストが死なれた時に、自分もそこで十字架につけられて死んだのです。そして今の自分を生きます。今の自分は、キリストと共によみがえった自分です。この信仰を持っていれば、使徒パウロのように、自分は「罪人のかしら」ですと、自分が過去に行なったことを思い出しながら、なおのこと神の恵みによって生きることができます。罪の責めはなくなりましたが、古い自分は罪によって死んだのだとして生きていくことができます。

2B 文書の伝令 9-14

8:9 そのとき、王の書記官が召集された。それは第三の月、すなわちシワンの月の二十三日であった。そしてすべてモルデカイが命じたとおりに、ユダヤ人と、太守や、総督たち、およびホドからクシュまで百二十七州の首長たちとに詔書が書き送られた。各州にはその文字で、各民族にはそのことばで、ユダヤ人にはその文字とことばで書き送られた。8:10 モルデカイはアハシュエロス王の名で書き、王の指輪でそれに印を押し、その手紙を、速く走る御用馬の早馬に乗る急使に託して送った。

時は、第三の月の二十三日とあります。ハマンがああ法令を作ったのが、第一月の十三日ですから二か月ちょっと経っています。その法令が施行されるまで九か月を過ぎました。したがって、モルデカイは急いで、新たな法令の詔書を早馬に乗る急使に託しています。その範囲は、全ペルシヤです。百二十七州に対して、それぞれの文字で、民族の言葉で書かれています。ここにも、キリストの型があります。キリストが死んでよみがえられたという福音の効果は、全世界に対して、あらゆる国語と、あらゆる国民に及ぶというものです。そしてキリストが再臨される時はもちろん、すべての国、すべての民、すべての言語にその支配が及びます。

8:11 その中で王は、どこの町にいるユダヤ人にも、自分たちのいのちを守るために集まって、彼らを襲う民や州の軍隊を、子どもも女たちも含めて残らず根絶やしにし、殺害し、滅ぼすことを許し、また、彼らの家財をかすめ奪うことも許した。8:12 このことは、アハシュエロス王のすべての州において、第十二の月、すなわちアダルの月の十三日の一日のうちにこなうようになっていた。8:13 各州に法令として発布される文書の写しが、すべての民族に公示された。それはユダヤ人が、自

分たちの敵に復讐するこの日の準備をするためであった。8:14 御用馬の早馬に乗った急使は、王の命令によってせきたてられ、急いで出て行った。この法令はシュシャンの城でも発布された。

ユダヤ人を根絶やしにするという法令は取り消すことができないので、根絶やしにすることを計画していた者たちを反対に根絶やしにする、という法令をモルデカイは作りました。ユダヤ人が防衛として自分たちを殺す意図を持っている者たちを殺します。これを根絶やしにすると決めた代十二月の十三日と同じ時に施行します。

これが午前中にお話した、「命の御霊の法則」であります。ローマ8章1-4節を読みます。「こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。なぜなら、キリスト・イエスにある、いのちの御霊の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放したからです。肉によって無力になったため、律法にはできなくなっていることを、神はしてくださしました。神はご自分の御子を、罪のために、罪深い肉と同じような形でお遣わしになり、肉において罪を処罰されたのです。それは、肉に従って歩まず、御霊に従って歩む私たちの中に、律法の要求が全うされるためなのです。」

私たちが肉の弱さのために、自分が憎んでいる罪を犯してしまいます。しかし、その肉をキリストが同じ肉体によって、神の処罰を受けてくださいました。ここに、「命の御霊の原理」が働いています。御霊に従うとは、初めに十字架に立ち戻ることです。そして自分が、キリストにあって決して罪に定められることはないという確信に立つことです。そこに御霊が働いてくださいます。キリストが律法の要求をご自分の死をもって全うしてくださったので、そのキリストが内におられるので、自分は律法から解放されているのです。その中で御霊に導かれることができます。

3B 王服をまとうモルデカイ 15-17

8:15 モルデカイは、青色と白色の王服を着、大きな金の冠をかぶり、白亜麻布と紫色のマントをまとうて、王の前から出て来た。するとシュシャンの町は喜びの声にあふれた。8:16 ユダヤ人にとって、それは光と、喜びと、楽しみと、栄誉であった。8:17 王の命令とその法令が届いたどの州、どの町でも、ユダヤ人は喜び、楽しみ、祝宴を張って、祝日とした。この国の民のうちで、自分がユダヤ人であることを宣言する者が大ぜいいた。それは彼らがユダヤ人を恐れるようになったからである。

見てください、王は自分の全ての権威をモルデカイに賦与したことを示すべく、王服を着せています。そして金の冠も冠らせ、王権を示す外套もまとうせています。その色合いは、1章に出てくる、アハシュエロスの催す宴会に現れた、王宮の飾りと同じであります。「そこには白綿布や青色の布が、白や紫色の細ひもで大理石の柱の銀の輪に結びつけられ、・・(1:6)」

思い出せば、ヨセフもエジプトにおいて同じようにパロの権威を身にまとい、その支配者になり

ました。そのヨセフも、モルデカイと同じように苦しみに会いました。兄たちから悪を受けましたが、それを神は善と計らってくださいました。モルデカイはハマンによって殺され、ユダヤ人も殺されそうになりましたが、この出来事によってペルシヤ王の権力を身にまとしてペルシヤを治めることができたのです。

この姿は、キリストご自身です。キリストはこの地上において僕の姿を取られました。そして苦しみを受けられました。けれども、神はこの方を死者の中からよみがえらせ、そしてご自分の右の座に着かせました。そしてこの方は立ちあがり、地上に戻ってきて神の全ての権勢をもって統治するのです。そしてキリストのものとされた者たちも、この方と共に世界を統治します。かつて、アダムに神が、「地を従えよ」と命じられました。その力がキリストによって回復し、キリストと共にこの世を支配するのです。

ここでユダヤ人たちが、歓声の声を上げて喜び踊っています。自分たちのモルデカイが王の権力をまとして現れたからです。同じように私たちも、主イエス・キリストが王の王、主の主として現れる時、歓声と喜びをもって見届けるのです。「その日に、主イエスは来られて、ご自分の聖徒たちによって栄光を受け、信じたすべての者の・・そうです。あなたがたに対する私たちの証言は、信じられたのです。・・感嘆の的となられます。(2テサロニケ 1:10)」

そして、「この国の民のうちで、自分がユダヤ人であることを宣言する者が大ぜいいた。」と言っていますが、これはユダヤ人になったと訳したほうが正確です。すなわち、異邦人だけでも、ユダヤ教徒に改宗したとのこと。そして、彼らはユダヤ人を恐れていた、とあります。そうでしょう、神を呪うものは呪われる、というその言葉がハマンに成就し、そして今はモルデカイの権勢によって、ユダヤ人であれば救いがあり、守られることを知っていたからです。

私たちは、イエス・キリストが死者の中からよみがえられた時に、神の子としてその全能の力をもって現れたことを知っています。「聖い御霊によれば、死者の中からの復活により、大能によって公に神の御子として示された方、私たちの主イエス・キリストです。(ローマ 1:4)」イエス様はよみがえらえたことによって、地上においても、天上においても、あらゆるものに対して権能を持っておられる神の御子であることを示されました。だから、私たちにはこの方の復活が喜びであり、祝いであり、栄誉なのです。主はこの権能をもって、神の右の座に着いておられ、この権能をもって世の反逆者らをことごとく滅ぼす裁き主として戻ってこられるのです。

2A 敵の除去 9

1B ユダヤ人への恐れ 1-10

9:1 第十二の月、すなわちアダルの月の十三日、この日に王の命令とその法令が実施された。この日に、ユダヤ人の敵がユダヤ人を征服しようと望んでいたのに、それが一変して、ユダヤ人が自分たちを憎む者たちを征服することとなった。9:2 その日、ユダヤ人が自分たちに害を加えよう

とする者たちを殺そうと、アハシュエロス王のすべての州にある自分たちの町々で集まったが、だれもユダヤ人に抵抗する者はいなかった。民はみなユダヤ人を恐れていたからである。

実際の日になりました。ここでの大事な言葉はもちろん「一変」です。ユダヤ人の敵がユダヤ人を征服するのではなく、一変して、ユダヤ人がその敵を征服する日となりました。勝利です。キリストがよみがえられ、そしてキリストにつく者もよみがえる時に、罪と死の法則が勝利の中に飲み込まれます。「しかし、朽ちるものが朽ちないものを着、死ぬものが不死を着るとき、「死は勝利にのめられた。」とされる、みことばが実現します。「死よ。おまえの勝利はどこにあるのか。死よ。おまえのとげはどこにあるのか。」死のとげは罪であり、罪の力は律法です。(1コリント 15:54-56)」

そして、ユダヤ人とユダヤ人の敵との戦いになってもおかしくありませんでしたが、その抵抗はありませんでした。その理由が、「ユダヤ人を恐れていた」とあります。思えば、イスラエルの民が通る時に、異邦人はそれを恐れるという約束がありました。ヤコブがシェケムから出ていく時に、レビとシメオンがシェケムの男たちを虐殺して怒りを買ってもおかしくなかったのに、「彼らが旅立つと、神からの恐怖が回りの町々に下ったので、彼らはヤコブの子らのあとを追わなかった。(創世 35:5)」とあります。エジプトを脱出して、荒野の旅をして、約束の地に向かう彼らを恐れる、ペリシテ人、モアブ人、アモン人、カナンの住民の姿を、モーセは紅海を渡った後の勝利の歌でうたいました(出エジプト 15:14-15)。そして、その通りとなり、イスラエルの間諜をかくまうラハブは、イスラエルの神を大いに恐れ、エリコの住民は怯えていることを伝えました。

9:3 諸州の首長、大守、総督、王の役人もみな、ユダヤ人を助けた。彼らはモルデカイを恐れたからである。9:4 というのは、モルデカイは王宮で勢力があり、その名声はすべての州に広がっており、モルデカイはますます勢力を伸ばす人物だったからである。

各地で、これらの上に立つ者たちはユダヤ人たちを助けました。午前中にお話ししましたように、頭がモルデカイになっていたのも、その権勢が各地に及んでいたのも、それらの権威はユダヤ人についてのことです。ここが大事です、頭がハマンからモルデカイに移ったのと同じように、頭がアダムからキリストに移りました。その事によって、今や、私たちは罪に定められるのではなく義と認められ、死ぬのではなく、命にあって支配するようになりました。ですから、私たちは既にキリストにある勝利を得ているのです。この方が勝利されたので、私たちもまた御霊の流れにすることによって、その勝利を生活の中で経験できます。その流れはすでに与えられています。私たちがその中にいることを知る必要があります。

9:5 ユダヤ人は彼らの敵をみな剣で打ち殺し、虐殺して滅ぼし、自分たちを憎む者を思いのままに処分した。9:6 ユダヤ人はシュシャンの城でも五百人を殺して滅ぼし、9:7 また、パルシャヌダタ、ダルフォン、アスパタ、9:8 ポラタ、アダルヤ、アリダタ、9:9 パルマシュタ、アリサイ、アリダイ、ワイザタ、9:10 すなわち、ハメダタの子で、ユダヤ人を迫害する者ハマンの子十人を虐殺した。し

かし、彼らは獲物には手をかけなかった。

各地で、ハマンに加担していた者たちを虐殺しました。シュシャンには、そのハマンについていた分子がたくさんおり、徹底的に殺さなければいけません。五百人を殺しましたが、実はもっとたくさんいます。そしてハマンの息子を十人、殺しました。そして大事なのは、「獲物には手をかけなかった」とあります。これは、後になっても繰り返されています。これは、ハマンの時のユダヤ人根絶の時の報酬の約束とは対照的です。ユダヤ人は、これが神からの裁きであり、かつてエリコの町がそうであったように、それは神に聖絶されたものであると考えたのでしょう。事実、ハマンの先祖アマレク人について、神はサウルに、すべてを聖絶せよ、男女も、子供も、牛、羊、ラクダも殺せと命じていました。

2B 一日伸びた喜びの日 11-19

9:11 その日、シュシャンの城で殺された者の数が王に報告されると、9:12 王は王妃エステルに尋ねた。「ユダヤ人はシュシャンの城で、五百人とハマンの子十人を殺して滅ぼした。王のほかの諸州では、彼らはどうしたであろう。あなたは何を願っているのか。それを授けてやろう。あなたはおも何を望んでいるのか。それをかなえてやろう。」9:13 エステルは答えた。「もしも王さま、よろしければ、あすも、シュシャンにいるユダヤ人に、きょうの法令どおりにすることを許してください。また、ハマンの十人の子を柱にかけてください。」9:14 そこで王が、そのようにせよ、と命令したので、法令がシュシャンで布告され、ハマンの十人の子は柱にかけられた。

エステルは、すでに殺された十人の死体を、柱にかけてほしいと王に願いました。これは見せしめのためです。ユダヤ人を殺そうとするものは、このようになるという見せしめです。

9:15 シュシャンにいるユダヤ人は、アダルの月の十四日にも集まって、シュシャンで三百人を殺しましたが、獲物には手をかけなかった。9:16 王の諸州にいるほかのユダヤ人も団結して、自分たちのいのちを守り、彼らの敵を除いて休みを得た。すなわち、自分たちを憎む者七万五千人を殺したが、獲物には手をかけなかった。9:17 これは、アダルの月の十三日のことであって、その十四日には彼らは休んで、その日を祝宴と喜びの日とした。9:18 しかし、シュシャンにいるユダヤ人は、その十三日にも十四日にも集まり、その十五日に休んで、その日を祝宴と喜びの日とした。9:19 それゆえ、城壁のない町々に住むいなかのユダヤ人は、アダルの月の十四日を喜びと祝宴の日、つまり祝日とし、互いにごちそうを贈りかわす日とした。

記念する日が、シュシャンとそれ以外の町々で一日ずれることになる、そのきっかけとなった出来事をここに記しています。シュシャンにはハマンにくみする残党がまだ三百人残っていたようです。それで次の日も殺した、ということが起こりました。ですから、元々十三日だけの出来事で十四日にはお祝いであったのが、シュシャンの町が十四日も戦ったので、休みを得たのは十五日になったのです。それで十四日にも祝い、十五日にも祝うこととなります。そして全体では、七万五千

人を彼らは殺しました。一つの州に分けたら、数百人単位であったでしょう。

2B 祭りの制定 20-32

9:20 モルデカイは、これらのことを書いて、アハシュエロス王のすべての州の、近い所や、遠い所にいるユダヤ人全部に手紙を送った。9:21 それは、ユダヤ人が毎年アダル月の十四日と十五日を、9:22 自分たちの敵を除いて休みを得た日、悲しみが喜びに、喪の日が祝日になった月として、祝宴と喜びの日、互いにごちそうを贈り、貧しい者に贈り物をする日と定めるためであった。

プリム祭の制定です。ここで大事なのは、「敵を除いて休みを得た日」ということです。神が裁きを行われて、それを完成されると神は休まれます。ノアの時代、その箱舟によって神は休みを取られました。箱舟がアララテ山にとどまったというのは、休んだという言葉と同じです。そしてイエス様が戻ってきて、敵どもを滅ぼされると、その後は休まれます。その休みは、ここにあるように祝宴であり、喜びであり、ごちそうであります。神の国においても、その始まりは祝宴であります(マタイ 8:11)。そして、これが自分たちの貪欲ではないことを示すため、恵みの分かち合いであることを示すため、貧しい人々にも贈り物をします。

そしてプリム祭は、悲しみが喜びに、喪の日が祝日になった日であります。これが神の慰めの回復のしるしです。イザヤ書 61 章にあるメシヤの預言がこうです。「主の恵みの年と、われわれの神の復讐の日を告げ、すべての悲しむ者を慰め、シオンの悲しむ者たちに、灰の代わりに頭の飾りを、悲しみの代わりに喜びの油を、憂いの心の代わりに賛美の外套を着けさせるためである。彼らは、義の樅の木、栄光を現わす主の植木と呼ばれよう。(61:2-3)」私たちが罪のために悲しむことが、神の恵みによってそのまま喜びに変わります。憂いの心がそのまま賛美に変えられます。それだけ神の慰めは深いのです。

9:23 ユダヤ人は、すでに守り始めていたことを、モルデカイが彼らに書き送ったとおりに実行した。9:24 なぜなら、アガグ人ハメダタの子で、全ユダヤ人を迫害する者ハマンが、ユダヤ人を滅ぼそうとたくらんで、プル、すなわちくじを投げ、彼らをかき乱し、滅ぼそうとしたが、9:25 そのことが、王の耳にはいると、王は書簡で命じ、ハマンがユダヤ人に対してたくらんだ悪い計略をハマンの頭上に返し、彼とその子らを柱にかけたからである。9:26 こういうわけで、ユダヤ人はプルの名を取って、これらの日をプリムと呼んだ。こうして、この書簡のすべてのことばにより、また、このことについて彼らが見たこと、また彼らに起こったことにより、9:27 ユダヤ人は、彼らと、その子孫、および彼らにつく者たちがその文書のとおり、毎年定まった時期に、この両日を守って、これを廃止してはならないと定め、これを実行することにした。9:28 また、この両日は、代々にわたり、すべての家族、諸州、町々においても記念され、祝われなければならないとし、これらのプリムの日が、ユダヤ人の間で廃止されることがなく、この記念が彼らの子孫の中でとだえてしまわないようにした。

プリム祭の由来が書かれています。ハマンがくじを引いて、第十二月の十三日としましたが、ペルシヤ語でくじをプルと呼び、その複数形がプリムです。そして、その祝いが十四日と十五日になりました。今はなしましたように、シュシャンでは十四日にも虐殺が行われたからです。そして、これを毎年、必ず守る祭りであると決めました。プリム祭は、主ご自身が定めたものではありませんが、確かに神の救いが働いていたことを記念するものとして、ずっと守られてきています。

今のイスラエルでも守られています。エステル記を読み、3章から出てくるハマンの名が出てくると、子供たちが叫んで、また、がらがらを使って音を立てて聞こえないようにします。ハマンはユダヤ人の敵だからです。そして、お祝いの時なのでこの時にお酒を飲んで羽目を外して良いことになっています。ですから私たちが2013年、聖地旅行についてエルサレムに滞在していた時に、街中はどんちゃん騒ぎで大変でした。

思い出すという命令を主は行われます。過越の祭りから始まり、三大祭りによって主がなされたことを思い起こします。私たちには、ただ一度、全ての人のために死なれたことを思い起こすよう命じられています。聖餐式です。

9:29 アビハイルの娘である王妃エステルと、ユダヤ人モルデカイは、プリムについてのこの第二の書簡を確かなものとするために、いっさいの権威をもって書いた。9:30 この手紙は、平和と誠実のことばをもって、アハシュエロスの王国の百二十七州にいるすべてのユダヤ人に送られ、9:31 ユダヤ人モルデカイと王妃エステルがユダヤ人に命じたとおり、また、ユダヤ人が自分たちとその子孫のために断食と哀悼に関して定めたとおり、このプリムの両日を定まった時期に守るようにした。9:32 エステルの命令は、このプリムのことを規定し、それは書物にしるされた。

ユダヤ人が敵を根絶やしにしてよいという法令の他に、このプリム祭を定める法令を、エステルも関わる事によって確かなものとなりました。これは、エステルなしには語ることのできない大きな出来事だからです。エステルが断食と哀悼をして、それで王の前に行き、執り成しをしました。このことも思い起こされるために、彼女がこの書簡の調印に関わったのです。

3A モルデカイの偉大さ 10

10:1 後に、アハシュエロス王は、本土と海の島々に苦役を課した。10:2 彼の権威と勇気によるすべての功績と、王に重んじられたモルデカイの偉大さについての詳細とは、メディアとペルシヤの王の年代記の書にしるされているではないか。10:3 それはユダヤ人モルデカイが、アハシュエロス王の次に位し、ユダヤ人の中でも大いなる者であり、彼の多くの同胞たちに敬愛され、自分の民の幸福を求め、自分の全民族に平和を語ったからである。

アハシュエロスは、苦役を課したと書かれています。徴税したとも訳すことのできる言葉です。つまりペルシヤの国をくまなく統治していたということです。そのペルシヤの世界の中でモルデカイ

が大いなる人物になっていたことを強調しています。年代記に記されているとありますが、確かにペルシヤの文献で、「マルドゥカ(Marduka)」と呼ばれる人物が、ダリヨス王の後記とクセルクセスの統治初期に、会計担当して記録に残っているそうです。

そしてモルデカイは、単に彼らを救い出すのに貢献しただけでなく、その後の統治も彼らの幸福のために動き、また平和を語っていたとあります。ハマンとは対照的ですが、キリストが私たちが支配されているならば、そこにあるのは全体の益です。また平和があります。これが、御霊の実としても私たちの間に結ばれることとなります。

これでエステル記を読み終わりました。ついに、バビロン捕囚後の歴史まで読み終わりました。次回から、詩歌に入ります。これまでのような時系列的な出来事を読んでいくのではありません。自分の心にある神への思いを言い表していくのが、詩歌です。初めは、自分の苦しみの中で義を求めるヨブを読んでいます。